

寺院による施活の実態と地域にもたらす効果に関する研究

A STUDY ON ACTUAL CONDITION OF ALMS ACTIVITY BY TEMPLES AND ITS EFFECT ON THE LOCAL SOCIETY

建築計画分野 加藤 和也
Architectural Planning Kazuya Kato

近年、葬式仏教と揶揄されている寺院が、地域社会とのかかわりを持つ活動を行っている。そこで、本研究では地域に対して様々な活動を行っている寺院に着目し、活動を始めた経緯や取り組み方といった活動の実態と特性を把握することで、活動が寺院や地域に対して与える効果を明らかにすることを目的とする。ヒアリング調査を基に、実体を捉え、寺院が行う活動の独自性や寺院や地域に与える影響を明らかにした。

In recent years, a temple that is ridiculed as funeral Buddhism is engaged in activities related to the local community. In this research, focusing on the temples that perform various activities in the area, and grasp the actual situation and characteristics of the activities such as how they started the activities and how to approach them, so that the effects of the activities on temples and communities. Based on the hearing survey, the actual situation is grasped and it is clear that the uniqueness of the activities performed by the temple and the impact on the temple and the area.

1 はじめに

1-1 背景と目的

近年、全国的な少子高齢化や人口の都市部への集中、地方における過疎化、地域住民の関係性の希薄化によって、地域社会においてこれまで築いてきたコミュニティを維持することが難しい状況に直面している。そのような社会的背景は、寺院にも影響し、檀家の高齢化や葬儀・法要の減少といった問題に悩まされている。また、葬式仏教と言う呼称に代表されるように人々の日常生活から離れた存在となっている。しかし、現在までの日本社会において、各地に所在する寺院は、葬儀や法要といった儀式的執り行いや、地域コミュニティの核となる行事の開催、地域における様々な会や集まりへの場の提供など多様な活動を通じて、地域コミュニティの形成・維持・発展において非常に重要な役割を担ってきた。そのため寺院は地域が抱えているコミュニティの希薄化といった問題を解決する可能性を有していると考えられる。そこで、本研究では地域に対して開いた活動を行う寺院を対象に、活動における着眼点や取り組み方、地域との関係性といった活動の実態や特性を把握し、活動が地域や寺院に対して与える効果を明らかにした上で、寺院が主体となって取り組む活動の有効性を述べることを目的とする。

1-2 言葉の定義

寺院が行う営利目的ではない地域に対して行う活動

を「施活」と定義し、施活を行う寺院を本研究における調査対象とする。また、「坊守」とは、寺や坊舎の番人のことを指すが、本文においては住職の妻を指す呼称として用いている。

1-3 調査概要

本研究は、寺院関係者の紹介を基に施活を行っている大阪府内の寺院8ヶ所(表1)の寺院関係者、活動参加者に①寺院の基本情報②施活の活動内容・活動経緯③施活の運営方法④寺院行事との両立についてのヒアリング調査及び、実際の活動に参加し、活動内容や空間の使い方に着目し寺院関係者・参加者の観察調査を行った。

2 寺院を取り巻く現状及び課題

寺院にとって葬儀や法要といった儀式的執り行いは、本来の役目として重要な立ち位置にある。しかし、都市部への人口流出といった問題が、従来家庭内において所属する寺院に関する出来事を引き継ぐ檀家制度の衰退へと繋がっている。また、家族形態の変化により核家族が増加し家庭に仏壇を持たない人々が増え、先祖とのつながりを実感する機会も減少している。それらが、若い世代における信仰心の希薄化[1]に繋がり、葬儀の簡略化[2]や回忌法要を行わず墓じまいをするといった問題が発生している。このような課題を抱える寺院において、儀式以外での関わりを地域と持ち、儀式の重要性を伝え、信仰心の希薄化とい

た問題に対して取り組みを行っていく必要性があると考えられる。そのため、既存の枠組みの中で従来の活動を繰り返すのではなく、長期的な視野を持ち、新たな活動を展開していくことが求められている [3]。

3 寺院が行う施活の特性

3-1 活動内容・活動経緯

寺院が行う活動は主に、日曜学校やキッズサンガに代表される宗教教育を主とした宗教的施活と、ベビーサンガ、子供食堂、ヨガなど宗教教育を目的としない非宗教的施活の二つに分類される。宗教的施活は、活動前後にお勤めや法話を行うなど、仏教に関する教えを説くことを主要な目的としている。そのため、子供向けの活動であることが多く、幼少期から地域の子供たちとの関係性を築くことで、信仰心の希薄化といった問題を解決する活動である。勤行や法話が終わった後はゲームやものづくり等の様々なプログラムが行われる。それらのプログラムは主に寺院関係者が決めている。非宗教的施活は、

表 2：寺院の現状に関するヒアリング内容

＜信仰心の希薄化＞	
[1] 今って核家族化が進んで田舎のおじいちゃんおばあちゃんの家に帰ったら仏壇があるけれど自分の家には仏壇がないっていう家ってすごい多いじゃないですか。二世帯とかで仏壇があるなら良いですけど、中々仏壇に手を合わせたこともないとかお参りしたこともないとかっていうような子供がすごい多い。【A】	
＜儀式の簡略化＞	
[2] 今は多様化の時代になったから、みんな直送とか家族葬とか避びる。現状として家族葬は増えている。余分なものは削りたい削りたいっていうのばかり。人の死がどんどん軽いものになっている。だから、残された側は思い出にならない。【F】	
[3] 大きな観光寺院は別やけど、街の中にある小さなお寺って言うのは地域活動に関わって、地域と結びついてこそ存在意義があると思うけど、ほとんどの寺院が出来ていない。【D】	

寺院の敷居を下げ、地域住民と儀式以外での関わりを持つために行っている事が多く、ヨガやコーラス、書道教室といった幅広い世代が参加できる活動が行われている。活動経緯は、家制度の衰退や核家族化による信仰心の希薄化といった宗教離れの問題に対し仏縁を持ってもらうために行う教化活動型[4]、地域や社会の抱える問題に対して寺院として何かできないかという思いを抱いた寺院関係者が活動を行う問題解決型、自らの持つ技術や子育てなどの経験を基に行う経験反映型、子供だけではなく大人向けにも集まる機会や学ぶ機会の提供をしてほしい【C】など檀家や地域住民の依頼によって始める依頼応答型、寺院の持つ空間が儀式以外で使われていないことに問題意識を持ち、空間を使って何かできないかという思いから始める空間活用型に大きく分類することが出来る。また、それらが絡み合って活動を始めるものもあり、布教のみを目的としていない活動が多く存在することが分かる[5]。

表 3：施活開始経緯・目的に関するヒアリング内容

＜宗教的施活＞	
[4] 本堂の中に入ってもらっているのは敷居が高いと思っている。例えば神社とかだったら外から手を合わせて、バンバンとするのは正月とかでもみんなやったりする。でもなかなかお寺の場合は外から見ても本堂の中を見るのがないのかなと。そういう時にキッズサンガという仏縁を通じて小さいときに、ああそういえば夏休みとか春休みとかにご本堂でゲームしたな手を合わせたなっていう記憶がある時に大きくなって初めて本堂に行くのと、小さいときにそういった記憶が少しあるのではまた違うのかなと思う【A】	
＜非宗教的施活＞	
[5] 地域活動をするためにお寺があるのではなくて、お寺の本来の役割として宗教をみんなにお伝えしたいというのが、いきなり法話を 2 時間座って聞かなくて言うのはしんどいから入口の低い階段をいくつも用意するというような感覚で活動を広げているというような状況。何かでお寺に縁が出来てくれたらなという思いでやっている。【C】	

表 1：事例概要

		A	B	C	D	E	F	G	H
所在地		大阪市住吉区	大阪市東淀川区	堺市東区	岸和田市	堺市堺区	大阪市東住吉区	堺市東区	東大阪市
宗派		浄土真宗本願寺派	浄土真宗本願寺派	浄土真宗本願寺派	浄土真宗本願寺派	日蓮宗	浄土真宗本願寺派	真宗佛光寺派	本門佛立宗
活動場所		本堂	本堂・会館	本堂	本堂・客殿	客殿	本堂	本堂	ホール
山門		○	○	○	○	○	○	○	×
広い庭		○	○	○	○	×	×	×	×
緑側		○	○	○	○	○	○	○	×
経緯	地域の抱える問題への意識	-	-	-	-	○	○	○	○
	本堂などの空間が使われていない	-	-	-	-	-	-	-	○
	第三者からの依頼	-	○	○	○	-	-	-	○
	宗教離れへの問題意識	○	-	○	○	-	○	○	○
	自らの経験	-	-	○	○	○	-	-	○
目的	寺院の敷居を下げる	○	○	○	○	-	○	○	○
	若い世代との交流	○	-	○	○	-	○	○	○
	宗教との関わりを作る	○	-	○	○	-	○	○	○
	地域問題解決	-	-	-	-	-	-	-	○
	教化活動	○	-	○	○	-	○	○	-
内容	地域コミュニティ活性化	○	○	○	○	○	○	○	○
	子育て支援	-	-	○	-	○	-	-	-
	ヨガ	-	-	○	-	-	-	-	○
	書道教室	-	○	-	○	-	-	-	-
	施活開始時期	2012年	40年以上前	1965年	1985年	2019年	50年以上前	2008年	2016年
頻度		年2回	週2回	月1回	週1回	月1回	月2回	月2回	週1回
参加人数		約30人	約30人	約15人	約10人	約10人	約20人	約30人	約10人
参加者属性	檀家	○	○	○	○	×	×	○	○
	地域	○	○	○	○	○	○	○	○
費用		無料	有料(必要経費)	有料(必要経費)	有料(必要経費)	無料	有料(必要経費)	無料	有料(必要経費)
施活発起人		僧侶	坊守	僧侶・坊守	僧侶	坊守	坊守	僧侶	坊守
運営		僧侶	僧侶・坊守	僧侶・坊守	僧侶・坊守	坊守	僧侶・坊守	僧侶・坊守	僧侶・坊守
施活前後宗教要素(勤行・法話)		有	無	両方	両方	無	有	有	無
保険・設備修繕費		寺院経費	寺院経費	寺院経費	寺院経費	寺院経費	寺院経費	寺院経費	寺院経費
協力者(ボランティア)	檀家	×	○	○	×	×	×	×	○
	地域住民	×	×	○	×	○	○	○	○
日常的往来	檀家	○	○	○	○	○	○	○	○
	地域住民	○	×	○	×	×	○	×	○
本堂使用率(施活以外)		月1回	毎週末	毎週末	月2～3回	月1回	月1～2回	月1～2回	月2～3回
地域団体への場所提供		×	×	×	×	×	×	×	○
支援	檀家	○	○	○	×	○	○	○	○
	地域	×	×	○	×	○	×	×	○
儀式や納骨への影響		×	○	○	○	×	○	×	○
施活参加者の自主的利用		×	×	×	○	×	○	×	×

3-2 活動の仕組み

- (a)運営 活動の多くは、寺院関係者の立会いの下行われる。活動日も寺院の都合によって決めているものがほとんどである。また、葬儀や法事といった行事が入った際は、活動に立ち会うことが出来ないため中止となる。活動参加者は、参加する際にその旨を伝えられており、それに納得した参加者が活動に参加している。しかし、住職の息子が成長して副住職になる[6]、寺院の改築の際に、葬式と施活がかち合わない用に空間構成を考えて改築する【H】などによって人手や問題点を解決している。
- (b)参加費 施活は利益を上げるのではなく、寺院の敷居を下げる事を目的とする活動が多く、無料や必要最低限の金額に設定されている。無料の場合、寺院の費用から捻出している。そのため。住職自ら活動に必要な物を手作りする【A】など費用をなるべくかけない努力が見られる。また、門徒が寺院に奉仕するような形を取り通常よりも安価な価格で引き受ける【H】、寺院のためならと無料で引き受ける【C,H】、明確な金額を設定せず誰もが参加できるように懇志とする【C】など寺院で行う活動ならではの特徴が見られる。
- (c)参加者の属性 教化活動として勤行や法話を行う宗教的施活は、檀家の割合が多数を占めているが、教化を主としない非宗教的施活では檀家とそれ以外の参加者が半々など檀家以外からの参加の割合が高くなっている。また、活動前後に簡単なお勤めなどを行う活動でも、口コミや寺院関係者の知人が参加することで、檀家が参加者に全く居ない【F】、檀家は数人のみで多数がそれ以外の子供【G】といった、教化の強弱によって大きく参加者の属性が変わっている。
- (d)保険・修繕 活動中に参加者が怪我をした時のために保険や、寺院の設備が壊れた際に必要な修繕費は全て寺院の経費から捻出している。施活によって畳の劣化が早くなるといった問題が生じているが、檀家は活動に対して前向きに思っていることが多い[7]。
- (e)ボランティア 多くの活動で寺院関係者以外の協力があり、人手が足りない時に声をかける、音楽大学出

- 身の門徒にコーラスの指導をしてもらう【B】といった檀家の協力や、子供の友達の祖母【E】、活動に来ている子供たちの両親【C,G】といったもともと寺院とのかかわりを持っていなかった人々が協力している。さらに普段の施活のみならず年に1度行われる大きな法要などで施活参加者の両親が、施活を通じて築き上げられた寺院との信頼関係のもと協力する[8]など、施活やそれ以外の活動においても寺院の運営をするにあたって協力者の存在が重要となっている。
- (f)支援 寺院が行っている活動に対し、賛同した檀家からの物的支援や金銭的支援があり、法事を行った家庭から子供会の参加人数を聞かれて、子供会用にお菓子のお供えをもらう【F】、餅つきの際に檀家からもち米の寄付【G】などお寺が持つ繋がりからの支援がある。また、檀家だけでなく地域住民からの支援もあり、お供えを買っているフルーツ屋が活動に感動して果物の提供[9]やおもちゃの支援【E】が行われるなど寺院の負担を最小限に抑えながら活動が行われている。
- (g)宣伝 活動の宣伝は、宗教活動と施活を両立するために、非宗教的施活参加者には宗教行事に関するチラシを配らず、置いておき興味を持ったら取ってもらう[10]、お寺なのでビラなどを配ることなく檀家の家にポスターやチラシを置いてもらい興味を持った人に見てもらう【D】など活動を両立していくうえでの工夫が見られる。
- (h)活動の展開 地域と接する中で様々な問題点を感じ、それらに対しての解決や、寺院が主催していた活動に参加した人からの依頼【D】や活動を通して知り合った他の地域団体と協力して寺院が持つ広い空間を利用する【H】といった寺院発信ではなく他の人や団体との縁により新たな活動へと発展している。
- (i)決まり事 寺院は豪華絢爛な装飾や高価な建具などを用いていることが多い。そのため、それらに触れることが無いよう施活を行っていくうえで決まり事を設けている。また、子供向けの活動の場合、低学年が寺院の設備などを壊さないように高学年に見守らせるといった工夫を行っている。

表4：活動の仕組みに関するヒアリング内容

＜葬儀による施活の中止＞ [6] 葬式が入ったら活動は中止してましたね。でも3年前に息子が副住職になってそれから葬式が入っても息子が立場上副住職やから、住職の代わりに行きますよって言うことで、もう檀家さんからも承知してくれている。そういう意味では2人居るって言うのは大きい【D】
＜保険・修繕＞ [7] 活動を初めてしばらくして畳を変えたんですね。それまで、もろが出てね、でもやっぱりその子供たちが暴れたりしたらもろもろが出やすいけど、活動に対して反対する話は出ませんでしたね。お寺はそういう子供たちが来ても当たり前のことなんやから、悪くなったら変えなあかんっていうので前向きに畳の表を変えてくれましたね。【G】
＜ボランティア＞ [8] 報恩講の時にたこ焼き屋いてくれたのはキッズサングの子供たちのご両親。だからその中には宗教違う方もいらっしゃるけど、お寺のそういう行事で毎回来ってくれる。直接ずっと本堂でお勤め聞くために座るってことはないけどお寺に来て手伝ってくれる。行事には参加してくれる。その前の準備のお餅つきとかも来てくれるし。だから身近には感じてくれているかな。だから家の宗教は違うけどうちのお寺やからお手伝いとかはいらっしゃる。手伝いに来るのは檀家さんだけじゃない。【C】
＜支援＞ [9] 果物はフルーツ屋さんがいつもお供え買っているお店があるんだけど、そこがうちがやってる活動に感動して、毎週火曜日にめっちゃいい果物差し入れてくれる。【H】子供食堂
＜宣伝＞ [10] お寺の行事のチラシはおとなサングでも置いてくねん。よかつたら持って帰ってって。こういう法座のやつはみんな宗教開きに来てからのお寺のやつとかこれからのご案内とかはパンパン配るけどね。土曜学校もお寺の行事なので、あれは宗教教化活動なので、その時はお寺の法座とかもちゃんと配るけど、キッズサングとか大人サングは階段を下げてあるので、一応強制はしないようにしている。色々な方がくるので。そこはものすごく気を付けている。【C】
＜課題＞ [11] ご法事なんかだったら私は法話をさせてもらいますけど、子供さんを相手とか、コーラスなんかでもそうですね。そういう門徒でない方と話す時っていうのは、宗教を強要しない。ちょっと難しい言い方になりますけど、例えば子供さんだったらね、我々って手を合わせるでしょ。これ念仏申すっていうようなスタイルを取るんですけど、子供さんにはありがたうを言いましょって言い方に変えるんですね。同じ手を合わせるでも、念仏の教えとはこういうものだよってご法事の際大人に話すことを、そういうことは言わない。今日もお父さんお母さん誰かのおかげでこうしてお菓子もらえたね、はい、手を合わせましょってね。だから、宗教を強要しないっていうのは一つ大事なことでと思いますね。【B】
[12] 最初はダンスも、ダンスを送ってきたお母さんたちが待っていた。その待つ場所を本堂にしてたら気が付いたら、仏さんスペースってあるんですよ前の方に。そこにお尻向けて腰かけてたりとか。結構行儀悪かったりで一人檀家さん辞めた人が居て、自分たちが大事にしている空間にお母さんたちが、待合室にしているんだけど、遊び場みたいにべらべら喋っていると、自分たちは本堂でお経する所なのって言うこともあって、それは帰ってもらうようにした。送って来たら帰ってくださいって。【H】

(j)課題 活動を始める際の課題として、活動に必要な物資の不足や儀式との両立、檀家でない参加者への接し方などが挙げられる。物資の不足は寺院が持つネットワークを活用し確保している。檀家以外の参加者に対しては宗派の説明を丁寧に行う事や宗教を強要しない事を心掛けるなど気を付けた接し方を行っている[11]。しかし、本堂を活用した施活では、参加者の本堂の使い方のマナーが悪く檀家をやめる[12]といった問題点もあり、檀家への施活の周知や檀家からの施活への理解が重要であると考えられる。

(k)場所貸し 寺院が日ごろ使われていない本堂を依頼によって場所貸しを行っている。それらが施活へとつながることもあるが、布団の販売会場としてや選挙の演説会といった檀家からの反対が想定される活動の依頼に関しては断っている。また、合気道チームからの依頼を一度試して畳への影響があまりにもあり断った【C】など地域の団体であっても寺院の設備に過度な影響を与える活動は断っている。

4 寺院が持つ資源による特性

4-1 空間

本堂は葬儀や法事といった儀式が行われていない場合、空いていることが多く、地域資源の一つとして大きな可能性を秘めている場である。実際に、地域住民からの依頼により場所を提供することで、その可能性を発揮しようとする例もある【C,H】。場所を提供する際、費用などは取らずその代わり法要の際に仏教讃歌

を謳ってもらう【C】、座布団の洗濯を手伝ってもらう【C】といった利用者の協力が見られる。空間の使われ方においても独自性があり、寺院は内部空間である本堂と外部空間である庭を縁側で連続的につないでいるため、本堂から庭で遊ぶ子供を親が見守る(図1【C】)といった、画一的な空間になりがちなコミュニティセンターなどと違い多様な場を提供している。本堂内でも、本尊が置いてある内陣よりでは子供たちは座ってお喋りをするなど静かな行動をするのに対し、外部に近い場所では、激しく動き回る(図1【G】)や、障子の開閉により活動に応じて広さを変更することが出来る(図1【F】)といった、場所によって行動が変わる神聖さや空間の多様性を秘めている場所である。しかし、改築をする前は子供が日常的に寺院の庭で遊んでいたが、改築を行い綺麗にしたことで子供たちが来なくなった【D】のように神聖さが寺院からの足を遠ざけているという課題の面も併せ持っている。

4-2 僧侶・坊守

僧侶という教えを説く立場の人物が活動の中にいることで、母親からの子供が死に対して恐怖を持っているからそれを取り除いてほしい[13]といった参加者が

表 5: 僧侶や坊守の存在による参加者への影響

＜僧侶や坊守の存在＞
[13] 来ている子供がね、死に対して割と恐怖心を持っていると。それを、お母さんに言ったらしくて、お母さんとしては、私に対して子供がこうこうで死に対しての恐怖心があるので、そういう子供の不安を取り除くような形で話をしてもええもんかっていう相談はありましたね。【G】
[14] コーラスなんかは19時からやって言っても仲の良い方は1時間位早くに来てずっと喋ってる。それは元々全然違う地域の方なんで、お知り合いじゃない方でもこのコーラスで知り合ってお友達になったっていうことで、あれは待ち合わせして来るとかじゃないと思いますけどね。気づいたら早く来るって感じになってると思いますよね。こちらは全然早く来ていただいても構わないですね。そうやって来ていただけると嬉しいです。【B】

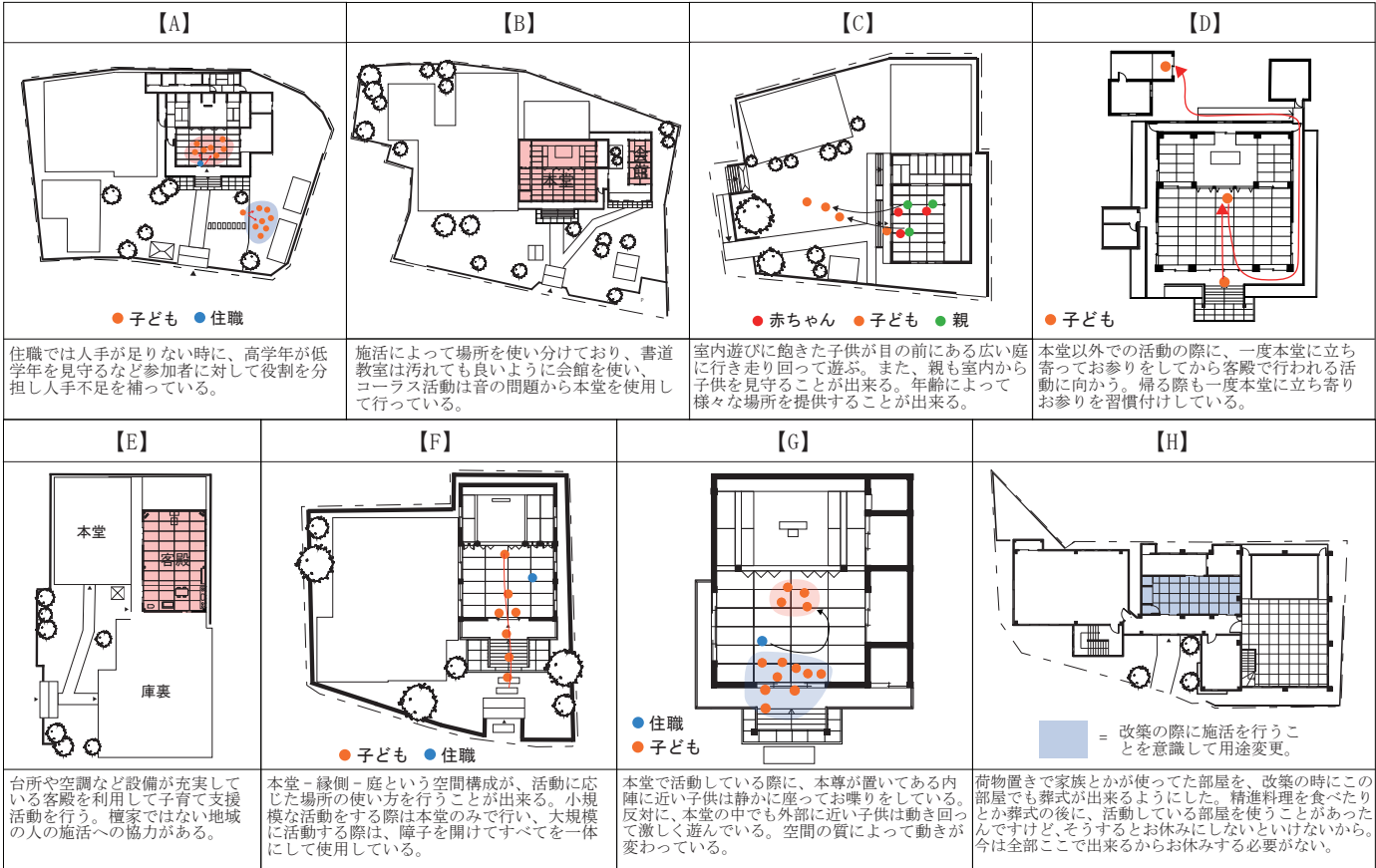


図 1: 各事例図面・空間活用概要

持つ精神的な悩みなどを吐き出せる場が作られていると考えられる。また、僧侶や寺院関係者が活動に参加することで、活動参加者がどの活動に参加しても寺院関係者が居るという安心感から積極的な他の活動への参加や活動開始より1時間近く早く来て参加者同士で話をする[14]といった行動に繋がっている。僧侶が積極的なコミュニケーションをとることで参加者同士を結び付け寺院を介して新たな地域コミュニティの縁づくりの一翼を担っている。

4-3 既存コミュニティ

寺院は地域の中で昔から生活している人々を中心に形成される檀家コミュニティを持っている。また、施活参加者は施活で初めて寺院との交流を持つ人も多くいる。それらが寺院を介して繋がることで多世代交流や、寺院でのつながりをさらに外部でのつながりへ発展させるといった交流の無かった地域住民同士をつなげるハブとして機能している。また、寺院も地域の世代間交流の断絶に対して問題意識を持っており、積極的な活動の展開を行っている(図3)。

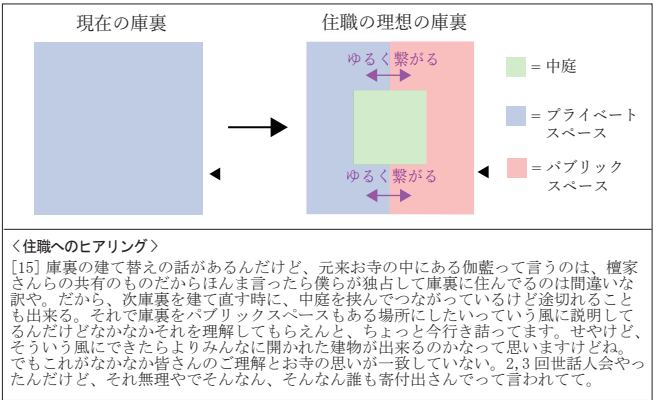
5 寺院・檀家と施活の関係性

5-1 寺院と施活の関係性

(a) 儀式や納骨への影響 寺院が地域に対して開いた活動を行うことで、普段寺院を訪れない人々の交流を持つことが出来る。幼少期の活動によって寺院に通う習慣が出来ていた人が成長した際に、檀家でないにもかかわらず葬儀法要を頼むこと【B, C, F, H】や、寺院が所有している納骨堂への納骨を望む【B, C, H】など、宗教行事のような敷居の高いものではなく、気軽に参加することが出来る敷居を下げた活動を行うことは、檀家制度が崩壊している現代において寺院の経営面にも影響を与えると分かる。

(b) 活動の多様化 施活を行っていく中で、地域住民とのかかわりの機会が増え、多様な価値観に触れることによって、視野が広がり、新たな発見や柔軟性を高めることに繋がっている。それらが、新たな施活への発展に繋がっている。

(c) 参加者の変化 施活を寺院の一番中心の活動と位置



づける寺院もあるなど施活は寺院にとって重要なものとなっており、参加者が自然と持参物をお供えするようになった【C】、参加者からの相談事を増え交流の重要性を認識する【B】など寺院関係者にとっても寺院の価値を再認識することの出来る活動になっている。施活に参加していく中で寺院との関係性が作られ、施活以外の宗教行事等への参加も見られ教化活動といった面にも施活は貢献している。また、寺院に対しての敷居が高いといった印象が変わり、学校に行くのがしんどい子が本堂に来て本を読む[16]、転校する子のお別れ会の会場として寺院を利用[17]といった施活参加者の自主的利用が見られる。

(c) 空間の変化への影響 施活を行う中で地域とのかかわりの重要性を感じ、改築の際に施活と葬儀がかけ合うことのないように、施活のための空間を設けている寺院もあり(図1【H】)、改築によって葬儀による施活の中止といった問題も解決している。【D】では住職の住まいである庫裏を、地域住民のための空間を備えた庫裏へと改築しようとしているが、檀家からの反対にあっている(図2)。このように、施活に応じた空間へと改築するためには、寄付を行う檀家の了承というものが重要となり、大きな法要で人が集まるときなどに5年ほど施活の紹介やVTRを流し地域においての施活の重要性を伝える[18]など、長い期間を要して檀家に周知していくことが大切である。

5-2 檀家と施活の関係性

(a) やりがいの提供 檀家は寺院の法要といった年中行事の手伝いを求められることが多く、寺院との受動的な関係性が手伝いの際に作られている。しかし、施活では参加者との交流を楽しみに手伝いに来る【H】、礼儀やマナーの指導、宗教への入り口をセットする役割を任せられる【C】など寺院から求められていることに対してやりがいを感じる檀家が多く、施活への積極的な協力に繋がっている。

(b) 意識の変化 自分たちの先祖がお金を出して建てた

表5: 施活参加者の自主的利用に関するヒアリング内容

＜参加者の自主的利用＞
【16】日曜学校に来て子かな。その頃ちょうどね学校で面白くないことがあったんか知らんけど本堂に来てシリーズの漫画を全部読んで帰った子がいた。坊主がその聞いてあげたりしながら、また元よく学校に行くようになったんかな。その子が折に触れて言うのは、中学か高校の時にね人間関係がうまくいかなくて、それでお寺に来てぼーんとしてた本読んでいたらすごく気が楽になって、また普通に暮らそうようになったってよく言ってる今でも。だからそういうのも一つみんなが集まる空間やけども一人静かにもの考えることが出来る時間があるって言うのはねまた一つお寺の良さなんじゃないかな。そういう時に、お寺のおばちゃんが居て話し相手になってくれたりとかそういうことをしてもらったのが嬉しかったって言ってるしね。【D】
【17】子供会とは全く別で、引っ越しが決まって女の子が居て、共働きで大変なお父さんお母さんいっぱいいるのにどこかの大きい施設借りようと思ったらお金かかるやん。でもお寺でタダで使ったら、タダなんですか？ってなって使ってくださいって実際にパーティーした。そしたらお寺の概念変わったって言ってた。お寺ってこんなことしてくれるのって。お寺ってこんなに楽しいのって言われた。未だに年賀状のやり取りはしてる。そういう風に、若いお母さんだからこそ頭柔らかいからそういう先入観が入っていき前に、そういう思い出たみたいなのが勝手に作れたから良かったと思う。【F】

表6: 空間の変化への影響に関するヒアリング内容【H】

【18】5年くらいかけてじわじわ浸透させていって、実際に檀家さんも虐待とか勉強出来ない子とか目の当たりにしているし、何かさせてもらわなあかんっていう気持ちもあったと思う。そこにこれはもう社会的な問題なんですみたいな形で、子供食堂の取り組みなんかも、ちよろちよろよろよろ、大きな法要の時はお墓参りを兼ねて100人ぐらい檀家さんがくる。その時に映像とかそういうの作って見せるわけ。いろんな活動って言うか、情けは人の為ならずみたいな、しかもあなたは仏教徒みたいな作って、善意は見えてこそ意味がありますみたいなのを5年ぐらいいかけて。5年に3回やったら15回ぐらい映像とかずーっと檀家さんたちに理解してもらえよう浸透させて、タイミング見計らって改築を始めようと思うんですけど。そしたら、はい！協力します！みたいな形でだだだだだ集まりました。思ったより早く。【H】

ものという意識から檀家のためだけの寺という認識が強かったが、施活を行ったことで檀家の意識がみんなの寺であるというものになっている[19]。また、幼少期から関わっているため若いころから積極的に寺院の行事を手伝ってくれる[20]、施活を始め孫が寺に来るようになり、寺院に対して良い印象を抱く【G】、菩提寺が広報誌や雑誌に掲載される機会が増え誇りに思うようになった[21]など寺院に対する檀家の意識が施活前後で変化している。

5-3 地域へもたらす効果

(a) 参加者への影響 寺院の神聖な場所と畳の空間という要素が参加者に対して礼儀やマナーを学ばせるのに効果的であり、指導を受けずとも周りの姿を見て正座をする【A】、掃除当番を務める檀家との関わりを普段から持っているため、子供たちがトイレなどの寺院の設備を丁寧に使う【H】など礼儀やマナーを自然と学べる場所として最適であると考えられる。

(b) 場所としての価値 多くの人が寺院は葬儀や法要といった儀式の際に訪れる場所という考えを持っている。しかし、寺院に気軽に訪れることが出来る施活を行い、寺院の敷居が下がることは、家庭や学校、職場とは異なるサードプレイスとして、地域の人々の安心感

やコミュニティの連帯感に大きな影響を与えることが出来ると考えられる[22]。

(c) 複層的コミュニティ 複数の施活を行う寺院では、一つの施活を超えたコミュニティが形成されている。寺院関係者という存在が、どの施活においても関わってくるため、参加者は安心して他の施活に参加することが出来る。また、同じ寺院での施活に参加しているという仲間意識が参加者同士の交友関係の促進につながっている。さらに、寺院がすべての施活参加者を対象とした、忘年会や食事会といった集まる機会を提供することで、寺院を取り巻く施活や檀家といった様々なコミュニティを結び付け一つの複層的なコミュニティの形成に寄与している(図4)。

6 結論

施活は、寺院が住職や坊主といった人的資源、広い本堂、縁側、庭といった多様な空間資源を掛け合わせ活用していくことで、公共施設とは異なる活動を提供しており、多世代交流や生涯学習の場として地域コミュニティの活性化に寄与している。また、寺院においても活動を展開していくことで檀家以外からの葬儀や法要の依頼、納骨堂への納骨といった寺院が本来持つ宗教的側面への影響も見られる。これらの有効性を持つ施活は地域コミュニティの衰退に歯止めをかけ、寺院の収入面への影響も与えることが期待できる。このように施活は、核家族や少子高齢化といった社会問題における地域の相互扶助機能の低下、コミュニティの希薄化といった問題を抱える地域社会と、葬式仏教による檀家以外の地域とのかかわりの減少、信仰心の希薄化による儀式の簡略化といった問題を抱える寺院において、両者の問題の解決の糸口となる活動であり、施活を行っていくことで地域がより豊かになり、地域資源の一つとしての寺院の価値が高まっていくと考えられる。

参考文献

- 1) 「ともに生きる仏教」(大谷栄一/ちくま新書/2019)
- 2) 「地域とともに未来をひらく お寺という場のつくりかた」(松本紹圭・遠藤卓也/学芸出版社/2019)

表 7: ヒアリング回答

＜檀家の意識の変化＞	
[19] 僕の方は元々から地域に開かれたっていう感覚でいるんですけど、その地域に開かれた地域って言うのが、この江戸時代に開墾した人たちの子孫が思っている地域と、僕の感じている地域とが違っているギャップはあった。この人たちは開墾したメンバーだけだと思ってたみたい。でもこの場所は西野って言うんですけど、西野っていう地区に開墾した人たちの子孫が30件ぐらい住んでいる。今、西野全体では3000世帯ぐらい住んでるから、圧倒的によそからやってきた人が多いという感覚で僕は地域の人って思ってるけど、でも開墾した人たちはこの寺はわしらの先祖が建てた寺やからわしらの寺やって言う感覚の方が多かったんですが、色んな活動をやっているとだんだんそれが薄まってきたみんなの寺っていう意識に檀家さんになってきましたね。[C]	
[20] (D) 檀家さんでも日曜学校に来てた若い人たちがすごく積極的にかかわって来てくれるようになったよね。お寺に自然に来てると思う。だから、そんな取り立てて日曜学校に来た子らが中心になって1つの組織作ったとかそこまではいってないけどもいろんなことに関わってくれて。こっちも、せっかく小さいころからお寺に来てくれてたわけだし何かしたいなって企画は考えたりしてる。[D]	
[21] それはすごいあると思う。自分の所のお寺に自信持ったって言ったらちょっと変だけど、うちの所良いことやってんていうそういう感覚にはなっているみたい。たまに載るからね広報誌とかに。普通に回覧板に挟まってる手紙とかに自分のお寺が挟まってるわけじゃないですか。それはうれしみたい。たまに取材とか来て回るとおばちゃんたちがいいそいそと並んで写真撮ってもらったりしてる。[H]	
＜場所としての価値＞	
[22] お寺で言ったら、居場所がないとか、例えば僕は今までそういうことないけど寝泊まりさせてとか、すべて本当はOK。その駆け込み寺って言うことを知らない。そういう重要性って言うの知らない。お寺=亡くなった人をどうにかするって言うイメージ持っているから、どっか怖いという怖。ここに来ると言うことが、でもここで子供会とかかかると言うことは楽しい事やん。だからお寺って楽しいところやし、行ったらおじちゃん喋ってくれるしみたいなアットホームな感じだと良いんだけど、何か敷居が高いとか怖いとかっていうことで、そりゃとどろき離れるよねって言う話なんだけど、実情はたぶん知らずともしないし、実情を知ろうと思ったらみんなインターネットで済むやんって思うんだけど、温かみはインターネットは教えてくれない。現場おいでや現場行きいやっていうのは別に古臭くもなんともなくて、そこに温かみがあって、人間ってこういう場所が必要だしこうやって携わらないといけないんだなって思う。[F]	

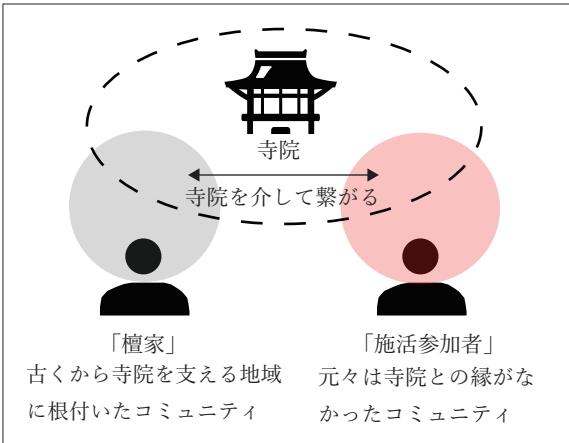


図 3: 地域コミュニティのハブとして機能する寺院

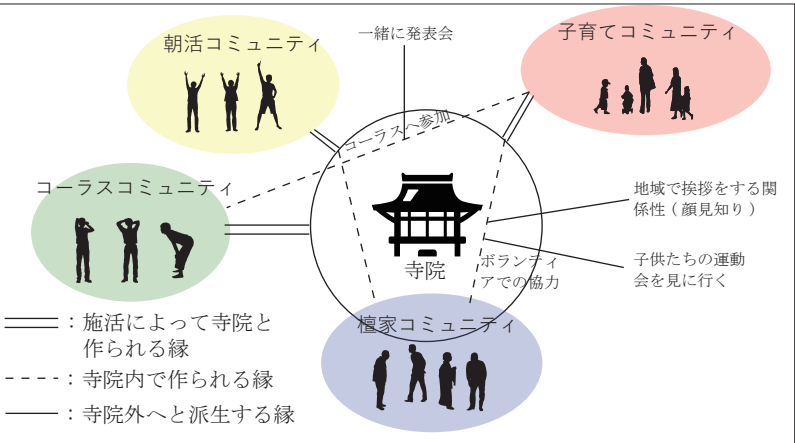


図 4: 寺院を介して複層的にコミュニティが形成される